



パネルディスカッション◎

希望の光を地域から

若者も高齢者もいきいきとくらしをまっさらにする

第1部 ナリワイ



大江正章・コムンス代表/ジャーナリスト◎コーディネーター
 平子昌彦・JF宮古漁協青壮年部部长/青年漁師
 鈴木美樹・鳴子「さとのわ」主宰
 佐藤彌右衛門・会津電力株式会社代表取締役社長

大江 東日本大震災から五年半が経ちました。震災から一年後の二〇一二年三月、私は福島の有機農業者の仲間たちと創った一冊の本に、「がんばろうから変わろうへ」と書きました。私たちは一体、何に向かってがんばるのか。そのことが問われないといけないと思います。あらためて確認しますが、東日本

大震災は天災で、東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故は人災です。原発という、戦後の高度経済成長を支えた象徴的なシステムのあり方、日本が追求し続けてきた成長志向からの脱却こそが問われているということを、安倍政権は何もわかっていません。いま考えるべきは、これまでないがしろにされてきた一次産業を再建し、一次産業とつながる二次産業

ネ配りの地方創生ではなく、地に足のついたビジョンをどう形成し、実現していくのか。まずは三人の方から、それぞれの取り組みをご紹介します。

漁師の仕事に魅力を感じて脱サラ

平子 岩手県宮古市でホタテの養殖をやっている平子といいます。盛岡で妻と出合い、仕事は休みの日に妻の実家のある宮古に行つて漁師の仕事を手伝っているうちに、漁師の仕事に魅力を感じ、自分にはもうこれしかないと思つて脱サラして宮古へ移住し、義理の父と一緒に漁師の仕事を始めました。

それから五年後の大震災で、船も養殖施設も資材も機械も、すべてを流されました。その時には本当に悩んで、もう漁師は諦めようかと思つたのですが、やっぱり自分には漁師しかない、また一から始めようと思ひ、今に至っています。他所から来た自分が、震災後は宮古漁協青壮年部長をはじめ、いろんな役員を

おおえ・ただあき
 一九五七年神奈川県生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。出版社勤務後一九九六年にコムンス創設。コムンスは、環境・アジア・農・食・自治などをテーマに暮らしを見直し、わかりやすいメッセージを伝えることをモットーとした出版社。三五年間で約三〇〇冊の本を創つてきた。主著に『地域に希望あり―まち・人・仕事を創る―』（岩波新書、二〇一五年）、第二回農業ジャーナリスト賞受賞、『新しい公共と自治の現場』（共著、コムンス、二〇一二年）、『田園回帰がひらく未来―農山村再生の最前線―』（共著、岩波ブックレット、二〇一六年）など。



三次産業をどう広げていくかです。

第一部のテーマは、地域の資源を生かしながら新たな仕事をどう創り出していくか、Iターン者も含め、地域づくりの担い手を地域にどう増やしていくのかです。国の拙速かつ今までと同じようなカ

務めさせていただいています。おかげさまで売り上げも年々伸びており、観光客にも大勢来ていただけるようになりました。水産庁の復興支援事業「がんばる養殖」も今年度で終了になりますが、これからは漁業にとらわれず、観光やレジャーなど宮古の海全体を広めていく活動をしたいと思っています。

大江 漁業の一番のおもしろさはどこですか？

平子 水平線の広がる海を見ると、生かされていることを実感できます。それに、いいことも悪いこともすべて一〇〇%自分の責任というのがおもしろいですね。

大江 一度は東京へ出てみたい、といった志向はなかったんですか？

平子 都会には全然興味がなかったです。何がいいんだろうな、東京はビルが多くて日影ばっかりだなんて思いました。地方は空も広いし太陽が当たるところが多い。自然は本当に厳しくて、津波や台風